

## ユニバーサルシティズンシップ育成と関連した 美術教育の在り方を探って (3)

中島 敦夫 岡 芳香 大和 浩子 内田 雅三  
中村 和世

### 1. はじめに

附属三原中学校・小学校・幼稚園（以下、三原学園と呼ぶ）では、一貫教育の中で子どもたちにつけたい力である「ユニバーサルシティズンシップ」を「どのような国に住もうとも、人間として普遍的に大切な資質や能力」と定義し、その育成をめざして研究を進めている。

図工・美術科では平成18年度より、学園全体の研究に連動し「ユニバーサルシティズンシップ」の重要な一要素として本学園が定義している「協同的創造力」を図工・美術の教育活動を通して育むための研究を始めた。本研究の目的は、私たちが美術教育の基底としている3日美術教育<sup>\*1</sup>を基に、「協同的創造力」の育成という視点での題材開発及び授業実践を通して、児童生徒の美的価値を高めると同時に豊かなユニバーサルシティズンシップを育成するための美術教育の在り方について探ることである。

### 2. 研究の目的・方法

本学園では、平成18年度から、21世紀型学校カリキュラム（通称「三原学園プラン」）の開発に取り組んでいる。言い換えればこれはユニバーサルシティズンシップを育むためのカリキュラムであり、以下の3つの力の育成を重視した開発を進めてきている。

- ①社会のグローバル化・高度情報化の中で活躍していくために必要な「国際的コミュニケーション能力」の育成
- ②社会の変化に対応していくために必要な教科学力「協同的創造力」の育成
- ③超少子化社会の進展の中でも、人間として普遍的に大切な人と人のかかわりを生み出すことができる「人間関係力」の育成

この中で、教科「図画工作・美術科」においては、主に教科学力としての協同的創造力を育成することが

本学園の目指すユニバーサルシティズンシップを育むことにつながっていくと考えた。そして、平成18年度は、「美術の教育」「美術による教育」における「協同的創造力」の定義を明らかにし、協同的創造力を育む学習題材や授業スタイルの開発について授業実践を中心に模索してきた。

今年度は、3年次としてそれを育成するための授業実践を行った結果から見とれる児童生徒の変容を分析することにより、ユニバーサルシティズンシップを育む美術教育の在り方について考察していくことを目的とする。

### 3. 図画工作・美術科としての協同的創造力

#### 3.1. 本学園の定義する「協同的創造力」

単に知識や技能を覚えるのではなく、共通の目的に向かって他者とかがわりながら、習得した知識や技能を生かし新たなものを創り出していく力

本学園では、21世紀型の「教科学力」を「21世紀初頭の社会の変化に対応することができる確かな教科学力」と捉えている。具体的には、教科学力を、現行の学習指導要領で示されているものを含めた不易な学力という側面と、21世紀の社会の変化にも対応していくための新たな学力という側面の両面をもつものと捉える。さらに、教科の学習で学んだことを自分たちの生活の改善や社会づくりに生かしていくことができる力を大切にすることとした。そして、このことを各教科が共通に目指すものとして、「関心・意欲・態度」など従来の4観点に加えて、新たに「協同的創造力」を掲げることにした。さらに、この力を育むプロセスとして、「学んだことを生かし→集団で学び合いながら→自分たちの新たな文化を創り出す」という過程を子どもたちに歩ませることが必要であると考えている。

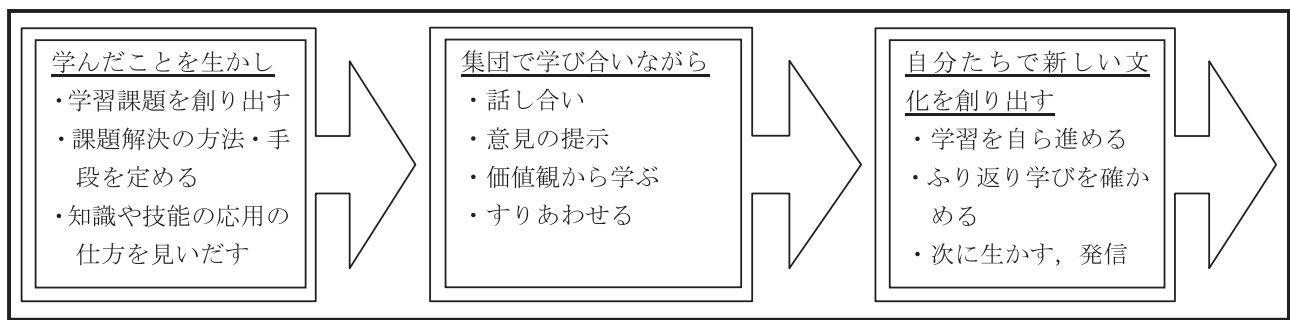


図1 協同的創造力を育むプロセス

このプロセスの積み重ねにより、協同的創造力を身につけた子ども、すなわち「自分たちで文化を創造する子ども」を育むことができるという捉えである。

### 3.2. 図画工作科・美術科で育む「協同的創造力」

自由な発想や表現で、人とかがわり合いながら、新しい文化を創造していく力

美術教育の目標は、表現・鑑賞の学習活動を通して子どもたちに、「心地よいもの・美しいもの」に関して興味を持たせ、さらに興味を深めさせていく中で、自分なりの美的価値を育ませることである。ここでいう「心地よいもの・美しいもの」とは、自分が、強い感動を受けるもの、作品からエネルギーを感じるものなど自分自身の美的価値を揺さぶられるものを表している。

そして、自己の美的価値を育みながら、同時に他者の美的価値を受け入れつつ自分の美的価値を見つめ直し高めさせていくことが大切である。これらは、自己の美的価値を高める「美術の教育」と、美的価値を高める過程における試行錯誤から育まれる人間性の高まり、つまり「美術による教育」の両面から構成されていくべきである。

ここで、前節で述べた「協同的創造力」の育成プロセスを図工・美術科に当てはめ、「協同的創造力」を発揮しながら生きている子どもの姿と美術教育の接点についてプロセスの3段階を次のように捉えた。

- ①既習の学習内容を生かす→これまで育んできた自分なりの表し方やみ方を生かし題材に向き合う。
- ②集団で学び合う→他者と共によりよい表し方やみ方の深まりを求め、自分のそれを他者とすりあわせる。
- ③新しい文化を創り出す→自己の美意識と共に新しい表し方やみ方を創り出す。

「集団で学び合う」プロセスの部分からも分かるように、本学園の定義する「協同的創造力」は「美術による教育」の側面を強く支えるものと考えられる。なぜな

ら、協同的創造力とは他者と関わりながら新しい文化を創造しようとする力であり、その創造する過程において育まれていくものだからである。もちろん土台に「美術の教育」があることは言うまでもないが、本研究では学び合いがあつてこそ美的価値の高まりがあることを強調したいと考えた。

## 4. めざす子ども像とつけたい力

### 4.1. めざす子ども像

自由な発想や表現で、人とかがわり合いながら、新しい文化を創造していく子ども

#### 4.1.2. つけたい力

##### ア. 心地よいもの・美しいものを見いだす力

「自由な発想や表現で」の内容は、3H美術教育で提唱されている「感じる力(Heart)」「考える力(Head)」「みる・かく・つくる力(Hand)」を総合的に集結したものと考えることができる。つまり「美術の教育」の側面である。自分にとって「心地よいもの・美しいと感じるものを見いだす力」を働かせる必要がある。

##### イ. 心地よいもの・美しいものを他者と共に楽しむ力

「人とかがわり合いながら」は、作品作り、鑑賞の活動を通しての行為とみなすことができる。つまり、ここに「美術による教育」の一端をみることができる。我々は美術教育をいわゆる「うまい」絵などを描かせるための教育だけだと捉えておらず、活動を通して人間的資質を高めていく営みであると考えている。鑑賞の活動においても、子ども達が主体的に楽しく活動する展開を通して、自分らしい見方や感じ方を育てていくことが、大切である。その視点でいえば「人とかがわり合う」という行為は人として生きていく上において、大変重要な資質の一つだといえる。「他者と共に楽しむ力」は、かがわり合いの大切な要素である。

##### ウ. 心地よいもの・美しいものを生み出すための工夫をする力

最後に、「新しい文化を創造して」は新たなものを

創り出していく行為である。美術的に捉えれば、それは作品そのものとも言えるであろうが、我々は更に、内面的な心情の広がりも含まれると考えている。例を挙げると、5年生では4～5人を1グループとし、実際に人が入れる大きさの「マイハウス」を共同制作しようという題材がある。この題材の場合、作りたい場所、デザイン、使いたい材料、作り方など、個々の思いは全く異なるであろうが、一人では成し得ない活動であるが故に、時には自分の思いを引き下げたり、時には自分のアイデアを主張したりしながら他者との意見交換を繰り返すことになる。困難を乗り越え完成した時には、知恵と工夫の詰まった新しい作品が出来上がると同時に、今まで気がつかなかった他者に対する新しい見方の発見、味わったことのない连带感も育まれてきている。これも、新しい文化の一つといえるのではなからうか。「工夫をする力」が「美術の教育」と「美術による教育」の双方を兼ね合わせた、「人づくり」に繋がると考える。

## 5. 研究計画

### 平成18年度

「美術の教育」「美術による教育」における「協同的創造力」の定義を明らかにし、協同的創造力を育む学習題材や授業スタイルの開発を授業実践の形態で提案していく。

### 平成19年度

前年度の計画や題材開発を行った研究を基にさらなる題材開発を行うと共に児童の実態調査、「つきたい力」を設定し、協同的創造力についての評価規準の作成に取り組む。

### 平成20年度

「つきたい力」を基に設定した評価規準の修正をおこない、3H美術教育を基にした「協同的創造力」と「ユニバーサルシティズンシップの育成」の関連性を児童生徒の変容から明らかにしていく。

## 6. 実践事例

### 6.1 小学校の事例

#### (1) 題材について

○題材名 「心わくわく・おもてなしアーチを作ろう」

○学年 小学校4年生 78名

○実施時期 平成20年5月～6月

○題材の概要

本題材は、校庭にある遊具や樹木等をネットで覆い、子どもたちが考えたテーマに沿って、色々な材料でネットを飾りつけてアーチを作るという活動である。色セロハンや竹などの材料をそのよさや特性を生か

し、五感全体を働かせながら飾り付け、グループで協力する中で友達の表現のよさや面白さを感じとることができる。活動後にアーチに自分の大切な相手を招待するという目標を設定することによって、「自分や相手が楽しめるアーチ」という明確な視点を持って、テーマを考えることができる。また、いっしょにアーチを通ることで、作品のよさを相手と分かち合い、作品作りの楽しさを感じることができる題材である。

#### ○題材の目標

- ・自分や相手が楽しめるアーチを作るためにいろいろな材料をすすんで試すことができるようにする。
- ・材料のよさや特性を感じ取り、テーマが活かせる発想を広げることができるようにする。
- ・五感を働かせながら、材料のよさや特性を生かして飾り付けができるようにする。
- ・自分や友達の活動のよさや面白さに気づき、関心を持ってみるができるようにする。
- ・集団で共通の目標に取り組み、材料を工夫して表現することの楽しさを感じとれるようにする。

#### ○学習計画（全7時間）

第1次 色々な材料で飾ってみよう (1時間)

第2次 招待する計画をたてよう (2時間)

第3次 おもてなしアーチを飾ろう (3時間)

第4次 アーチでおもてなし (1時間)

## (2) 学習の実際

### 題材との出会い～試し作り

導入として、体育館一面に張られた大きなネットを子どもたちに提示した。頭上一面に広がるネットを見て子どもたちは、喜びの声を上げ、活動の意欲付けをすることができた。その後、各々が好きな場所に自分の好きな材料を飾り付ける活動を行った。色セロハン、竹、包装紙、スズランテープ、風船等の材料を飾り付けた。子どもたちは、色セロハンを組み合わせで色合いを工夫したり、竹をぶら下げることによって、ふれた時の感覚や音を楽しんだり、和紙に香水を染み込ませて通ったときに香りがするようにするなど五感全体を働かせて工夫しながら活動していた。

### 計画

完成後に自分達の招待したい相手をアーチに招待することを提案した。話し合いの結果、かわり活動と一緒に活動をしている幼稚園のペアさんに決定した。その後、前回の試し作りの経験を想起しながらテーマを設定した。子ども達のイメージをキラキラ・サワサワなどのオノマトペに置き換え、テーマに入れていくことで五感を意識して表現できるようにした。

### アーチの飾り付け

場所は運動場ということで子どもたちの想像は、広がっていく。テーマをもとに風船に水を入れて涼感を再現する、色セロハンをネットの上に敷き詰めてできた影の美しさに感動する、テープに鈴をつけ、風になびかせることで鳴る音を楽しむなど屋外での造形活動ならではの活動が多くみられた。また、活動にあたっては、一方では高いところに登って飾り付けを行い、もう一方では下から飾り付けのバランスを見るなどして役割分担をするグループ、大きな材料を数人で持って飾り付けをするグループ等があり、様々な形でかわり合いながら活動をしていた。



写真1 「外での飾り付け」

アーチでおもてなし

完成したアーチの幼稚園のペアさんを招待して一緒に手をつないで通った。ペアさんは、「きれい。」「すごいね。」「おもしろい。」など歓喜の声をあげて楽しんで通っている。その姿を見て、4年生の子どもたちは、非常にうれしそうであった。残り時間がわずかになった時は、「自分たちはいいからペアさんだけでも。」とペアさんだけ並ばせて通らせるなど相手意識が育っている姿を見ることができた。



写真2 「アーチをいっしょに通る様子」

(3) 成果と課題

○子どもの自己評価の結果

表1からどの項目も90%以上の子どもたちが、肯定的回答をしていた。友達との共同制作について満足感を得ており、その意義を感じ取っているようである。

また、他者に認められることでその効果は高まっている。

成果としては、表2にあるようにグループごとに自由な発想でテーマを設定し、五感を働かせて材料を工夫しながら表現することができた。完成後にペアさんを招待して、互いの作品を鑑賞したという経験は、4年生の子どもたちはもちろん、ペアである年長児にとっても、次の表現活動に生きてくるものである。

表1 題材終了後の子どもたちの自己評価結果

振り返りの視点	とても	まあまあ	あまり	ぜんぜん
①友達と制作した作品を見ていいと感じた。	59%	38%	3%	0%
②友達の作品やアドバイスがヒントになった。	59%	35%	4%	2%
③ペアさんを招待してよかった。	83%	16%	1%	0%

表2 設定したテーマと使用した材料 (一部)

アーチのテーマ	使用した主な材料
サラサラヒヤヒヤ	水風船 竹 モール タフロープ
キラキラヒラヒラ	タフロープ 包装紙 光沢のレイ
クンクンにここに	生け花 和紙 香水 竹

しかしながら、表1にあるように全員の子どもたちが、活動に対して満足感を感じることができたわけではない。「活動に集中してアドバイスをする暇がなかった。」等のコメントもあり、制作に当たっての相談タイムを設けるなどの場の設定が必要であった。

6.2 中学校の事例

(1) 題材について

- 題材名「アメリカの文化・日本の文化」
- 学年 中学校2年生 84名
- 実施時期 平成20年11月～12月
- 題材の概要

この題材は、アメリカ現代美術を代表する作家アンディ・ウォーホルの作品を題材に、芸術作品の背景としての文化について考え子ども自らが表現する活動を仕組んだものである。芸術分野の特性を生かし美的な楽しみを味わいながら他国の文化を学び、世界に目を向けさせていくことができないうという発想から、この題材を考えた。ウォーホルの作品は、アメリカの日常を象徴するコーラ瓶・スープの缶詰・女優の写真などをモチーフとしたものが多い。さらにそれらを画面上でリズムカルに繰り返し描き、モチーフの面白さを強調している。アメリカの日常をウォーホルの楽しい

「繰り返し」の表現から読みとり、さらに「日本の日常」を表現し発信するには何をモチーフにできるかを考えることで、造形活動と文化理解を同時に行うことができる題材である。

本学年の子どもは、「アートリンク」というアメリカの学校との作品交流プログラムに参加しており、10月末に自己紹介シートとともに作品を発送している。また英語科の取り組みでニューヨークの中学生とメール交換を行っており、さらに今後沖縄への修学旅行で米軍基地内のアメリカ人家庭に全員が別れてショートステイを行う予定であるなど、アメリカとの交流活動が盛んな学年である。子どもたちの交流への意欲は高く、国際コミュニケーション科の学習にも積極的である。しかし、海外の同年代の子どもと交流する面白さや新鮮さには魅力を感じているが、交流相手国の文化的背景や日本文化との相違点などについては深く学習しておらず、そのため外国の文化に対する興味を喚起するに至っていない。美術の授業への取り組みに関しては、友達の作品を見ることについて意欲が低かった（昨年度実施アンケートより）ため、意識的に他者の作品を鑑賞する機会を多く設けている。

#### ○題材の目標

- ・作品の文化背景をよみとる活動を通して、美術と文化のかかわりに興味や関心を持つ。
- ・色・形などの造形要素や描画材を考慮したモチーフを選び作品のアイデアを練る。
- ・アイデアを元にモチーフの特徴を生かした描画ができるようになる。
- ・友達の作品を相互鑑賞する活動を通して、他者の意見やみ方を受け止め、自分を取り巻く日常の中にあたり美しい美しさや面白さを発見する喜びを味わう。
- ・他者とかかわり合いながらともに作品を創りあげていく楽しさを味わう。

#### ○学習計画（全3時間）

第1次 ウォーホルの作品を鑑賞し、日本文化の発信を計画しよう (1.5時間)

第2次 8年2組版「ドル記号群」を完成させよう (1.5時間)

## (2) 学習の実際

### ウォーホルの作品に学ぶ

導入として、「アメリカの食べ物とって思いつくものをグループごとで出来るだけたくさんあげよう」とゲーム仕立ての活動を仕組んだ。ハンバーガーやコーラなど、子どもたちは楽しそうに思いつくものを並べていった。絵画作品のモチーフになりにくいはずの「商標のある食べ物」を作品化しているアメリカの

作家がいるんだよと紹介すると、モチーフの身近さもあってか、子どもたちは大変興味を持ってウォーホル作品にみいつていた。大変有名なキャンベルスープの作品とコカコーラの瓶の作品をとりあげ、その面白さを意見交流しながら鑑賞した。

子どもたちからは「これだけ並ぶと迫力がある」「本当に1つずつ描いている。すごい」「もしこれが日本の食べ物だったら、たぶんカップ麺が並ぶ」など、自分たちの国に置き換えて考えている姿も見られた。

その上で、「ドル記号群」という作品を紹介し、3作品に共通する繰り返しの面白さに気付かせていった。さらに「ウォーホルは自分の大好きだったアメリカの日常をこうやって並べてアピールした。私たちは日本の日常をアピールする何か記号を並べて、ウォーホルに挑戦してみないか」と投げかけた。その「記号」を学級で決めて全員1枚ずつ思い思いの技法で表現し並べてみようという提案すると、絵画表現に対し苦手意識を持つ子どもも少なくない中で、全員で取り組むとなるとどんな「記号」にしたらいかが、また日本のアピールとして何が最適か、意欲的に考えを出し合っていた。

### 8年2組版は「ひらがな記号群」

予定時間を超えるほどの熱心な話し合いの末、「ひらがな」を記号としてとらえ、「ゐ」や「ゑ」も含めた48文字を1枚ずつ制作し並べていくことに決定した。ウォーホル作品のように「同じ記号を繰り返す面白さ」にこだわった意見もあったが、子どもたちは48種類の「違う記号を並べる」ことを選択した。

- ・日本のアピールとして何が最適か
  - ・絵画表現が苦手な人でも気軽に描けるのは何か
- という2つの視点で子どもたちの意欲を大事にしながら「ひらがな記号群」の制作に入った。

誰がどのひらがなを担当するかはくじで決め、台紙の色は30色の中からそれぞれ自分の好きな色を選ばせた。画材や素材は自由とし、教室中央にクレパス・水性クレヨン・マジックペン・色紙・和紙・千代紙などを準備した。参考となった「ドル記号群」が配色の面白さのある作品だったので、配色カードを活用し文字の色を考える子どもが多かった。

また、水彩絵の具やポスターカラーを使用する姿もあり、多様な表現が次々と生まれていった。

時間内にはほぼ全員が制作を終え、黒板に貼った白いロール画用紙の思い思いの位置へ自分で貼り付けていった。終了間際、黒板前は大混雑となり、「同じ台紙の色が並ぶと面白くないからこっちがいい」「決まった言葉がわざと出来ないように貼った方が芸術っぽい」などの意見が交わされ、楽しみながら作業を終えた。

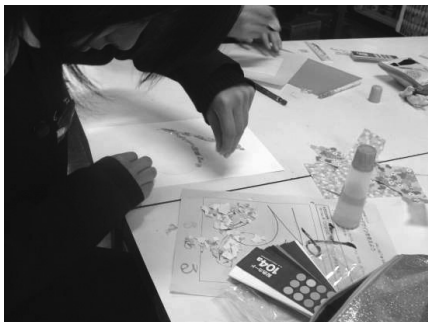


写真3 「ちぎった千代紙を貼って『る』を制作」

### (3) 成果と課題

自己評価の結果は、表3のようになり、どの項目も肯定的評価が8割を越しており学習のねらいはある程度達成できたものと考えられる。

表3 題材終了後の子どもたちの自己評価結果

自己評価の視点	とても	まあまあ	あまり	全然
①自分なりの表現を獲得できた。	47%	49%	2%	2%
②日米の文化の差異について考えた。	49%	49%	2%	0%
③友達の作品から学ぶことがあった。	72%	23%	0%	5%
④友達との会話が制作に役立った。	41%	41%	10%	8%

特に本題材で「他者からの学び」を95%の子どもが感じている。友達の作品をみるという活動に関し意欲が低かった実態を考えると、本題材が協同的な資質を育む視点において効果的であるといえよう。

しかし、短時間での活動であったため、じっくりとアイデアや技法を練る場面はなかった。色・形・イメージなどについてもっと豊かに表現できるよう、授業構成や「記号」の選定などについて検討していきたい。



写真4 「ほぼ完成した『ひらがな記号群』」

## 8. 研究のまとめ

・ 図画工作・美術科における協同的創造力の育成のため

めのプロセスを構築し、それに基づいて題材を開発・実践することができた。

- ・ 協同的創造力を育むためには、お互いのアイデアや表し方を交流することが必要となる場面を設ける題材を年間計画の中に意図的に配置することにより、段階的に育成することができる。
- ・ 題材選択時の留意点として、お互いのアイデアや表し方を交流する必要性を持たせること、完成作品を発信する相手を事前に決定しておくこと等が大切であることが分かった。
- ・ 美術教育における多文化理解の側面からも、海外の美術作品の鑑賞を取り入れた表現活動の実践ができたことは、新しい題材開発の視点を得ることになった。
- ・ 協同的創造力の育成を図るためには、今後、個人制作の題材と共同制作の題材を年間指導計画の中にバランスよく、系統性をもたせて配列、実施する必要性がある。また、鑑賞の学習を通して子ども達の鑑賞への関心を高め、創造力、人間関係力を増進させるような題材を開発し、実施していくことも有効である。

## 9. おわりに

3年間、協同的創造力を重点的に育む題材を開発することができた。1年間かけて学習する「クレイアニメーションに挑戦！」(選択美術)「学校を飛び出せ！ Creative Artオリジナル附小っ子だるまin三原神明市」(選択図画工作)などもその一つである。今回の実践事例も含め、わたし達は、「子どもたちが自分にとって心地よいもの・美しいものを追求する充実感、仲間がいるからこそできる新しい文化創造による連帯感を味わうためには」ということを日々考えながら題材を模索することができたと感じる。

教師の題材開発に対するひらめきは、児童・生徒の目線に立ち、児童・生徒の生活を肌で感じようとする構えに直結する。今後もこの構えに少しでも近づけるように実践を積み重ねていきたい。

### 註及び参考文献

- \* 1 「図画工作・美術科重要用語300の基礎知識」 若元澄男編集 明治図書 2000年 P21
- 1) 「21世紀の初等教育学シリーズ7 図画工作科教育学」 若元澄男編 協同出版 2002年
- 2) 「21世紀型教育への提言 幼小中一貫で育つ子どもたち」 広島大学附属三原学園 編著 溪水社 2008年